

伝え・切磋琢磨し合う者
高橋 康二 さん



感謝の気持ちでメロンを作る

安平町に来る前は、本州で仕事をしていて。そこで管理職を務める中で、やりたいうことが自由にできなくなっていく環境にもどかしさを感じ、その思いが日々強くなり退職しました。何かを作りたいと思ってた矢先に、アサヒメロンに出会って。当時は今みたいに研修制度が充実していた訳ではなく、林出勇一さん（一樹さんのお父さん）や組合が受け入れてくれて。この受け入れがあったのも、自分の前に就農した新井さんが、ひたむきに農業に励んでいたからだと思います。こうやって人

伝えることはメロン作りだけでない

に恵まれアサヒメロンの生産に携われているので、感謝の気持ちしかありません。恩を返すには「高橋に来てもらって良かった」とならないといけないので、ひたむきにアサヒメロン作りに励むのみです。

林出さんと共に研修生の受け入れをしています。技術指導はもちろんですが「ただメロン作りができる」という農家になって欲しくないと思っています。「常に疑問を持つ生産者になって欲しい」というか。というのも、アサヒメロンは「組合」という形で生産しています。時には、全体の

利益のため、自分の労力や時間を使うときもあります。もちろん、新規就農者への指導だってそうです。ただ、自分の時間も大切ですが、それだけなら組織の運営ができません。そして、生産者だって育つことができません。「本質は何か？」ということなんです。目先の利益だけでなく、将来を見据えた行動をしないといけないのも思っています。アサヒメロンを文化として、更なる歴史を築いて行く。そういう使命感を持って取り組んでいるし、そういう文化に携われているということはありがたいことです。そういう丁寧な気持ちで伝え、組合員共々更なる飛躍を目指したいと思っています。

アサヒメロン農家に生まれて

祖父・父親とアサヒメロン農家で、物心がついたときには農業に触れていました。嫌々手伝ったという記憶がなく、自然と「農業を継ぐんだろうな」と。本格的にアサヒメロン作りを始めたのは20歳過ぎ。アサヒメロンの生産を始めた最初の農家の一つが林家だったので、生産技術を学ぶ環境は恵まれていました。ただ「林出の息子はどんなメロンを作るんだ？」と言われていたような気が。父親に恥をかかず訳にもいかない、品質が劣るメロンを作る訳にも

アサヒメロンというプライド

今より質を落とさない。少しずつでも

父親から農場経営を引き継ぎ、代表となつた今。父親の姿を追い越せるよう努力するのみです。

自分の代で終わっても良いかなと思つていますが、このコロナ禍で学校が休みの息子が作業を手伝ってくれて。そこで「俺も農業やろうかな」とボソッと口にしたのを耳にしたときは嬉しかった。ただ「継いで欲しい」という気持ちはなくて、また「継ぎたい」と思ってくれるように、父親としての姿を見せていきたいですね。

高水準を目指すのが、我々が目指すところ。生産者同士厳しい目で、出荷するメロンを検査する。味は良かったとしても形がいびつだと流通すらないどころか、出荷すらしない。厳選された1玉を世に送り出しています。他の産地と比べ戸数も収量も多い訳ではありません。規模が小さいブランドでも品質であれば勝負ができる。だからこそ、流通させるアサヒメロンの品質を落とす訳にはいかないんです。出荷量を増やすことで知名度やブランド力が高まるかもしれないけれど、組合としては高品質なメロンを世に出し続けることが大切だと思つて、日々の生産に取り組んでいます。

親子3代で文化を繋ぐ者
林出 一樹 さん

